

## 詩篇 128 篇

## 都上りの歌

## 《主を畏れる者の家庭》

- 1 幸いなことよ。すべて主を恐れ、主の道を歩む者は。
- 2 あなたは、自分の手の勤労の実を食べるとき、幸福で、しあわせであろう。
- 3 あなたの妻は、あなたの家の奥にいて、豊かに実を結ぶぶどうの木のような。  
あなたの子らは、あなたの食卓を囲んで、オリーブの木を囲む若木のような。

## 《主を畏れる者の集団》

- 4 見よ。主を恐れる人は、確かに、このように祝福を受ける。
- 5 主はシオンからあなたを祝福される。あなたは、いのちの日の限り、エルサレムの繁栄を見よ。
- 6 あなたの子らの子たちを見よ。イスラエルの上に平和があるように。

120 篇：カナンの地の外に住む者の歌

121 篇：巡礼の旅の歌

122 篇：エルサレム神殿到着の歌

123-133 篇：祭で歌われる祈り

134 篇：帰路に着く者への祝福の祈り

本篇は前篇と内容的に似た部分があり、「双子の詩篇」と呼ばれることもあります。信仰者の家庭における祝福について語られている点において共通項があります。内容的なまとまりとして見るとき、本篇は信仰者の「家庭」と「集団」という二つの側面を描いていることが分かります。私たちキリスト者に置き換えてみると、家庭生活と教会生活ということになるでしょう。これらは別物なのではなく、両方で受ける祝福が折り重なるように相乗効果をもたらすものとなります。旧約イスラエルにおいては、とりわけ共同体の家族的意識は強かったようです。

「幸いなことよ」で始まる1節は、詩篇1篇の語り出しを思い起こさせます。「主への畏れ」を心の中心に置いて生きる人は、まず仕事において祝福を受けると言われています（**自分の手の勤労の実を食べるとき**）。主を畏れて仕事に取り組むとはどういうことでしょうか。自分が当然やらなくてはならない仕事以上のことを主にあって喜びつつ積極的に行なうということでしょう。それも、誰かに見られているからではなく、神に喜んでいただくことを熱心に求めている状態です。そのように生きている人には必ず天来の祝福があり、約束されている以上の報酬を受けるようになります。

3節では、妻との良い関係のうちに与えられる祝福が描かれています。「家の奥」という表現は面白いですが、これは箴言7:11で悪い模範として「この女は騒がしくて、御しにくく、その足は自分の家にとどまらず」と言われているのと対照になっています。この時代、女性が家庭を守ることが美德として考えられていたことが反映されているのでしょうか。また、「豊かに実を結ぶぶどうの木」と言われているように、多くの子どもに恵まれることも祝福の一側面として考えられていました。しかし、聖書の世界においても現実には厳しく、祝福された家庭においても不妊で苦しんだ女性が多く見られます（サラ、リベカ、ラケル、ハンナ、エリサベツ…）。そして、神が彼女たちを深く心に留めておられたことも忘れてはならないでしょう。

後半の4～6節では、主を畏れる者の集団生活における祝福が描かれています。「シオン」は「エルサレム」の言い換えであり、神の祝福は神殿があるシオンの丘から流れ来ると考えられていました。本篇が「都上りの歌」の一つに数えられていることからして、礼拝者たちがこぞって神殿を詣でる姿を思い浮かべることができるでしょう。そこに集まった人々は多くの巡礼者でしたから、初対面の人も多かったはずですが、それでも彼らは同じ主を信じる者としての一体感を味わっていました。この感覚は、私たちクリスチャンが同じ信仰を持つ人々と共にいるときに感じる平安、イエス・キリストを同じ主として崇めることのできる喜び、信仰的な話を遠慮なくできる幸いと違いはありません。世界のどこにあっても「神の家族」と出会うことができるのです。「あなたの子らの子たちを見よ。イスラエルの上に平和があるように」（6節）と締め括られ、子々孫々に至るまでもこの信仰が継承されていくことが願われています。

信仰者に注がれる祝福は、家庭生活と集団生活の両方で培われ、更にそれは外の世界へと向けられていきます。内側で充満した力が世界に向けて溢れ出ていく。それが、礼拝堂を後にした私たちの六日間の歩みです。主の祝福をいっぱい受け、この世に向けて派遣されていく。そして、戦いを終えて再び主の許へと戻ってくるのです。